日露対照言語文化研究
―気になる人目―

Kekidze Tatiana・田中聰子

キーワード　*日露対照研究、人目、立場、свои 、認知言語学*

0. はじめに

異なる言語、例えば日本語とロシア語とを比べてみたとき、文字通りには全く同じ意味を表わしていると思われる言語表現を見出すことがしばしばある。しかし、ある表現の意味に含まれる暗黙の期待や前提は言語によって当然異なるはずであり、それが両表現の意味の違いとなる。より一般的に言えば、言語表現の背後にはその言語に特有の概念世界―その言語を話す人々に共通する世界の捉え方の総体―があり、それが言語表現の意味の違いをもたらす。したがって、概念世界の特徴を記述することは、言語学の対象からはずすべきではなく、むしろ言語の意味論にとって本質的な研究課題であると考えられる。

言語の背景をなす概念世界の特徴を記述するには、異なる言語の母語話者による共同作業がとりわけ有効であると我々は考えるにいたった。母語に集約されるものの見方、世界の捉え方は母語話者には普遍的なものと感じられ、自分ではその特異性に気づきにくいからである。この研究方法は、認知言語学の基本的主張（Langacker 1987，Lakoff 1987）およびFillmore（1982）の意味論的提言を出発点とし、さらにWierzbicka（1997）の比較文化論的考察をも視野に入れつつ、我々がたどり着いたものである（詳しくはKekidze＆田中2004参照）。

本稿は、そうした異なる言語の母語話者の共同作業による概念世界の違いにまで踏み込んだ日露対照言語文化研究の一環として、「気になる人目」をテーマに取り上げる。人目を気にするという点で、日本語社会とロシア語社会は明白な共通性を示す。しかし一歩踏み込んで調べて見ると、そこにはかなりの違いがある。その違いは、それぞれの概念世界のキーワードであると我々が仮定する「立場」および «свои» によって説明できる。«свои» は日本語の「身内」に近いが、違いも大きく、必ずしもそれと同一視できない概念である（田中＆Kekidze 2005a参照）。

1. 気になる人目

人目を気にして誰かの行動を規制する表現は、日本語でもロシア語でも日常よく用いられるものである。日本語では「人が見てるよ」、「人に何を言われるか」、「人が何と言うか」などの表現がそれである。

⑴「タカナ、他の人が見てるよ。あんまり、みっともない真似しないでよね」
(http://www1.linkclub.or.jp/~kun-u/trpg/replay1.html)

⑵クリスマスイブの夜、仕事がたくさん残ってるにも拘らず、定時で切り上げる。こんな日に残業したら、職場の人に何を言われるかわからない。
(http://dokuron.fc 2 web.com/n/118.html)

同様に、ロシア語でも «на тебя же люди смотрят» (人が見ているよ)、«что скажут люди? » (人が何と言うか)、«что о нас подумают? » (私たちは何と思われるか) などの人目を気にする表現がしばしば口にされる。

⑶ Боря, как тебе не стыдно — на тебя же люди смотрят!
(http://www.planetaquarium.com/library/c_peterbur1237.html)
(ボーリャ、君、恥ずかしくないの？人が見てるのよ！)

⑷—Как, Костенька, вас не будет на вашем дне рождения?! А что скажут люди?
(http://spintongues.vladivostok.com/Ganichev11.htm)
(え、コースチャちゃん、あなたは自分の誕生パーティーに出席しないの？人が何と言うかしら？)

こうした人目を気にする表現がしばしば用いられる一方、人目を気にしすぎることを問題視する発言も日露両言語で散見される。

⑸誰だって人の目や、他人が自分をどう思っているかってことは気になるものだ。そういう神経があるからこそ、人と上手くやっていける。確かにそれはそうだよ。でもね、人の目が気になり過ぎて、人の目に振り回される人生。そんなのは嫌だよね。
(http://homepage2.nifty.com/masapapa/hitonome%20%20.htm)

⑹ Подумайте! Только я призываю Вас, принимая решение, ориентировать - ся на то, что будет лучше для Вас, а не на то, “что люди скажут”.
(subscribe.ru/archive/home.modebeauty.womanstory/200407/06000848.html - 31k —)
(考えてください。ただ、「人が何と言うか」ではなく、自分にとって何がいいのかを考えて決断するよう、お願いします。)

このような表現が多用されること自体、いかに人目を気にする人が多いかを逆に暗示するものである。このように、人目、つまり世間の評価を気にする傾向がかなり強いという点を取り上げるならば、日本語社会もロシア語社会も同じであると言うことができよう。

人目を気にすることの背景には、‘みんなと同じ’ようにふるまうことへの要請があると思われる。ここで括弧つきにしたのは言語による違いをとりあえずは捨象するためである。その括弧つきの‘みんなと同じ’、そしてその裏返しである‘みんなと違う’の内容およびその価値づけは、両者においてはたして同じなのかどうか、違うとすればどのように違うのか。以下でそれを検討してみたい。

2. 行動規範としての‘みんなと同じ’

2. 1. 日本語「みんなと同じ」―甘んじるレベル―

日本語社会における「気になる人目」を考えてみるとき、その背景にあるのは、「みんなと同じ」であれという強い社会的要請である。「みんなと同じ」であることは、日本語社会で生きる者に対して暗黙に、また時には露骨に要請される行動規範となっている。

⑺俺みたいなタイプの奴が職場で言われる小言のトップ３

・「何でみんなとやり方を合わせようとしないんだ？」

・「どうしてみんなと同じペースでできないんだ？」（以下略）

（http://strange.egoism.jp/sovs/overview/200403/20040331.html）

⑻はみ出す事はいけない事なの？みんなと違う事するのはダメな事なの？はみ出しちゃったら人生はないの？はみ出す。恐くて私には出来なかった事。みんなに混ざって同じように同じ事しとけば安心だった。

（http://211.9.199.2/TODAY'S%20GRAB%20hamidasu.htm）

「みんなと同じ」の実例を検索してみると、上例のように、この社会的規範を一種の圧力として否定的に捉えたものが多い。社会的規範は、その中に安住していれば意識することもないが、それが苦痛になってはじめて意識され言語化されるからだと考えられる。

日本語の「みんなと同じ」の「みんな」は、「ふつう」、「人並み」、そして「常識」という表現の含意する人または人々の概念に相当するものと考えられる。

⑼どうしたらみんなのように普通になれるんでしょう。

（http://www.hakusensha.co.jp/in_candy/02nayami/kiite38.html）

⑽私は体が弱い。だから会社に勤務する事が人並みに出来ない。

（http://www.ne.jp/asahi/nyao/n１agency/sigoto_06.html）

⑾「顔は洗（あら）たんですか、歯は磨いたんですか」「そんな一般常識人のするようなこと、このわしがすると思うか」　（黒川博行『てとろどときしん』、181頁、講談社文庫）

「ふつう」という言語表現には、人の行動を規制するための用法が慣習的に確立している。「ふつう、そんなことはしない」などの形で現われるこの用法は、「ふつう」であることが社会的規範となっていることをよく示している。

⑿言うまでもないことですけどね、ふつう そんなこと、たしなみのある女のすることじゃありませんよ。

（http://homepage2.nifty.com/Eva-Genji/tama-tubaichi3.htm）

⒀それからさあ、俺、電車に乗ってるときに鼻毛を手入れをしてる女の人みたことあるんだよ。ふつうそんなことするか？

（http://rico.main.jp/meguri/oniichan2.html）

同様に「常識」も人々の行動を規制する社会的要請として働く。日本語の「常識」には、ロシア語に対応するものの無い「非常識」という対義語があるが、これは規範としての「常識」に従わない行動を非難するときに用いられる。

⒁「街」で社会生活を送っている以上、私たちは社会的常識や道徳に沿って生きていかなければ、白い目で見られるかシカトされてしまいます。だから、本当は「めんどくさいこと」なんだけど、やらないと「非常識」だと言われるから、やる。

（http://homepage3.nifty.com/bzephyr/kanasiki.htm）

このように、「みんなと同じ」、「ふつう」、「人並み」であること、あるいは「常識」に従って行動することは、日本語社会の社会的規範として、つまり「人目」を気にするときの動機として機能している。

ここで「ふつう」や「人並み」という基準を価値評価の視点から考えてみよう。「ふつう」および「人並み」は、大多数の人々のいわば平均値的なレベルを表す表現でもある。例えば次の例では、「優しい」というプラス評価を否定するために、中立的なレベル、つまり平均的レベルを表すものとして「ふつう」と「人並み」の両方が持ち出されている。

⒂一郎　「あ、どうも。優しいんですね」

ユカリ「人並みです。ふつうです、ふつう」

（http://blog.goo.ne.jp/ichi-raw/１）

平均値である「人並み」ないし「ふつう」は、それに達しないと思われる場合

にはとりあえず目指すべき目標となるが、人々がずっとそこにとどまることを望むような理想的なレベルではない。それは、「人並み」や「ふつう」という表現が「せめて」や「～でいい」などという表現と頻繁に共起することから明らかである。

⑯人より大きくなんて贅沢言わないけど　せめて人並みになりたいんですよ。　(http://www.mypress.jp/v２_writers/rabbit1000/)

⑰「普通」とか「人並み」でいいという人間は、当社では必要としていません。　(http://www.tfd-res.co.jp/saiyo/about/president_msg.html)

このように、「人並み」や「ふつう」は、人々が最終的に目指すレベルではなく、妥協するレベル、甘んじるレベルであると言える。

日本語の「常識」についても同じことが言える。「常識」の概念には、理念に基づく普遍的なあり方という側面よりも、大多数の人々のいわば最大公約数的なあり方やその知識という側面の方が顕著に含まれている。それは、「常識」を簡単に変える（覆す）ことができたり、古い「常識」と並んで新しい「常識」が存在したりすることが、日常よく目にする一般的な言語現象であることに表れている。

⑱日本経済新聞社編スーパー便利帳『常識が変わる』（書籍タイトル）

⑲ためしてガッテン：過去の放送：新常識　わが家の医学
(http://www.nhk.or.jp/gatten/archive/2003q３/20030827.html)

また「常識を疑う」、「そんなのは常識だ」、「常識を知らない」などといった表現を日常頻繁に耳（目に）にするところから、大多数の人々の共有する知識という具体性を帯びた意味の側面が顕著であることも明らかである。後で見るように、こうした用法はどれもロシア語の «здравый смысл»（常識）には適用できない。つまり日本語の「常識」の概念には、ロシア語とは対照的に、きわめて具体的で現実的な、あるいは世俗的な傾向が見られるということである。

以上に見てきたところから、「人並み」ないし「ふつう」であること、「常識」に従っていることは、つまり「みんなと同じ」であることは、価値評価の点からすれば平均値的なレベルのあり方であって、最終的な目標というよりもやむを得ず甘んじるレベルのあり方であると言える。ではそれに代わって目指すものは何だろうか。ロシア語社会と比べてみた時、日本語社会で特に目につくのは、勝ち負けによって評価を表す傾向である。最近よく聞かれるものとしては、「勝ち組」、「負け組」という表現がその具体例と言えよう。

⑳つまり、大きな物やお金を動かせる富裕層の方が優遇されるため、市場の効率化が進むと小口の低所得者層は排除されていきます。「勝ち組は益々豊かに、負け組は益々貧しく」これでは、負け組といわれる人たちが生き

ていく術が無くなり、社会がうまく行くはずがないので、累進課税や社会保障制度を使って所得間格差を埋める所得移転を行っているのです。

（http://www.geocities.jp/dokodemodoa_jp/）

また論議を呼んだある本の著者は「30代以上・未婚・子なし」の女性を「女の負け犬」と呼んでいる。ほかに「勝負下着」という表現も広告などで目につく。そうした流行の表現だけではなく、次のような表現も、勝ち負けを通して価値を判断する傾向を示している。

㉑「めざましテレビ」の人気コーナー『メディア見たもん勝ち！』が番組を飛び出して、土曜日の夕方に『メディア見たもん勝ち！ゼルマ』として登場します！ （http://www.fujitv.co.jp/b_hp/selma/）

㉒確かに、我が子はかわいい。近所のガキを横目で見ては「フッ、勝ったな」とほくそ笑む親バカなワタシだ。

（http://kitayu.com/MAMA/MM_VO03.HTM）

このほか、「女（男）は～で勝負」式の表現、また「先に好きになった方が負け」という言い方もある。こうした勝ち負け表現で価値判断を表わす日本語は日常よく耳にするところである。ここに挙げた一つ一つは、それ自体をロシア語に訳して訳せないものではなかろう。しかし問題は、こうした勝ち負け表現が日常生活の中に浸透しているその度合いにある。日本語社会ではその度合いが高く、何事につけ勝ち負け表現が使われる。ただ、話し手はそれをあまり意識していない。勝ち負け表現はそれだけ日本語の中に溶け込み、話し手にとってはほとんど無色透明な中立の表現に近づいていると見ることができよう。

2－2. ロシア語 «все как у людей» —目指すレベル—

ロシア語社会でも、他の人とは違うことをする人に対しては、«а ты что - особенный? »（あなたは何、特別なの？）という批判がしばしば向けられる。ロシア語話者は、人から「あの人は特別（особенный）だ」というレッテルを貼られることを恐れており、«А что я, особенный? »（私は特別なの？）という反問の言葉が会話でよく用いられる。またみんながしたがらないことをするように誰かに勧められたときには、«Мне что, больше всех надо? »（私は何、みんなより多くを必要としているの？）と反問して断ることが多い。

㉓－Часть вины за неудачу ты возложил на себя?

－А что я, особенный? Конечно ...

（http://www.terrikon.dn.ua/today/press/belik05072003.htm）

（（負けたサッカーチームの選手とのインタビュー）

－チームが負けた責任の一端は自分にもあると思っていますか？

―私は特別なんですか？そりゃ当然でしょう...）

(24) Если чеченцы не служат в вооруженных силах, то какого рожна я буду служить? Мне, что, больше всех надо?

（http://www.russ.ru/gb/an104/an104b.htm）

（チェチェン人が軍隊に入ってないのであれば、なんで私が入らないといけないの？私は何、みんなより多くを必要としているの？）

このように、特別であること、つまりみんなと違うことは、ロシア語社会においても嫌われることなのである。

ただし、「みんなと同じ」という日本語に文字通りに対応する «как все» という表現は、非個性的で、自分自身で考えることをしないというマイナスのイメージが強く、大人の間ではまず使われない。例えば、«как все, так и я»（みんながやっているから私もやっているんだ）などの表現は、軽率な行動を取ったと責められたときの言い訳として、ティーネージャーがよく使うものである。

それに対して、大人のロシア語話者がしばしば口にするのは、«все как у людей»（すべてにおいて人と同じ）という表現である。

(25) Она за меня искренне переживает. Она хочет внуков, и чтобы у меня всё было “как у людей”, ведь я у неё единственный сын.

（www.gays.kz/society/mama.htm23k）

（母親は心から私のことを心配している。孫をほしがっていて、そして僕にはすべてにおいて「人と同じ」であることを望んでいる。だって、僕は彼女の一人息子なんだから。）

この例文の「母親」と同様に、多くのロシア語話者にとって「人と同じ」であることは何よりも望ましいことである。一方、気に入らない、納得がいかないような状況については «все не как у людей»（すべてにおいて人とは違う）という表現が使われる。

(26) «Все не как у людей» - велю я выбить на фамильном гербе. Потому что это планида. Собиралась как все нормальные люди домой, но, видно, как-то не так собиралась. Потому что все нормальные люди собрались и домой все же ушли, а у меня как раз начались приключения.

（http://www.livejournal.com/users/oldlady_journal/3280.html）

（「すべてにおいて人々とは違う」と家の紋に書き込むことを命じよう。これはもう運命なんだから。すべてのノーマルな人々と同じように家に帰ろうとした。しかし、何かを間違えたのかもしれない。だって、すべてのノーマルな人々は支度して帰ったのに、私にはそこから様々な災難が起こ

り始めたんだから。）

上の例文の話者は、自分が様々な災難に遭っていることを非常に不満に感じており、それを «все не как у людей»（すべてにおいて人と違う）として表している。

こうした表現の中の «люди»（人々）は、上の例が示すように、«нормальные люди»（ノーマルな人々）と言い換えることができる。この «нормальные люди»（ノーマルな人々）は、日本語の「ふつう」や「人並み」に含意される人または人々の概念にしばしば対応するように見える。例えば、以下の例文の «нормальные люди» は、「ふつうの人々」という日本語に相当すると考えて問題は生じない。

(27) ...средний билет туда стоит 100 фунтов стерлингов . Разве нормальный человек может себе это позволить? Только японские туристы и богачи.

（http://www.alefmagazine.com/naedine/article_341.html）

（…そこ（劇場）のチケットは平均して100スターリングもする。こんな費用を負担する余裕がノーマルな人にあると思う？（買うのは）日本人観光客とお金持ちだけだよ。）

しかし、こうした類似の側面にも拘わらず、このロシア語表現の表す概念を日本語の「ふつう」や「人並み」の含む人または人々の概念と安易に同一視することはできない。大多数の平均値的な人々の概念を核とする日本語表現に比べ、ロシア語表現はもっぱら本来あるべき理想的な人の概念を表すからである。まず次の例を見てみよう。

(28) Разве нормальный человек может жить спокойно, есть, пить, спать, когда вокруг столько несчастных детей ...

（www.ug.ru/02.05/t29.htm - 40k）

（周りに不幸な子供がたくさんいる中で、はたしてノーマルな人が何事もないかのように生活し食べて飲んで寝ることができるものだろうか？）

この例文だけを見るなら、«нормальный человек（люди の単数形）»（ノーマルな人）は、日本語の「まともな（きちんとした）人」という表現に対応しそうに見える。そして日本語「ふつう」や「人並み」にも、こうした「まともな人」という表現で表わされる概念が含まれていると思われる。しかし、ある社会が認知する「まともな人」の内容は、当然その社会の言語を支える概念世界によって決まるはずで、日本語のそれとこの例の «нормальный человек» とをストレートに対応させることはできない。このロシア語が表す内容は、次の例が典型的に示すように、‘義務’、‘信条’、‘祖国’のような高尚な理念を本質的要素とする理想的な人間像である。

㉙ Обнаружилось чудовищное зияние на месте понятий «долг», «вера», «родина» … Понятий, необходимых каждому нормальному человеку ...

(http://www.apn-nn.ru/diskurs_s/339.html)

(すべてのノーマルな人にとって欠かせない「義務」「信条」「祖国」の概念が欠落していることが明らかになった。)

ここで‘祖国’の概念が‘義務’や‘信条’の概念と共に «нормальный человек» (ノーマルな人)の本質的要素となっていることは注目に値する。ロシア語社会において «родина» (祖国) とは、後で取り上げる感情的共同体 «свои» の一つである。一方、日本語「まともな人」には、少なくとも現代語としては、どのようなものであれ‘祖国’の概念が本質的要素として含まれるとは考えられない。「ふつう」も「人並み」も同様である。そこではむしろ、後述するように、「立場」の概念の方が顕著である。日本語に比べ、ロシア語 «нормальный человек» (ノーマルな人) には理念的、理想主義的な傾向がはるかに顕著である。

同様な違いが、日本語の「常識」と辞書的にそれに対応するロシア語 «здравый смысл» との間にも見られる。このロシア語表現は、人間の理想的とも言える健全な判断能力を表し、日本語の「常識」のように具体的な知識としての意味を含まない。従って、「そんなのは常識でしょ」、あるいは「常識を知らない」といった用法に対応する使い方をすることができない。さらに、このロシア語表現は日本語の「常識」のように日常の卑近な問題に関して用いられることはなく、きわめて深刻で重大な問題に関してもっぱら用いられる。

㉚ Долгие годы ведется война в Чечне. То, что это преступление, любая мотивировка которого фальшива и убога, сегодня понимает любой здравомыслящий человек.

(eelmaa.net/enote/128 - 67k)

(長年にわたってチェチェンで戦争が行われている。この戦争は犯罪であり、その正当化に使われるどんな理由も虚妄であることを、今では常識ある人間なら誰でもわかっている。)

ここでは «здравый смысл» は、身近な知識やマナーなどではなく、人間として要求される本質的な資質を表している。

以上に見てきたところから、日本語の「ふつう」、「人並み」、「常識」がいわば人々の平均値ともいうべきレベルであり、せいぜい甘んじる程度のものであるのと比べ、ロシア語における «нормальные люди» (ノーマルな人々) や «здравый смысл» (常識) は目指すべき理想的なレベルのものと言うことができる。これがロシア語表現 «все как у людей» (すべてにおいて人と同じ) の

基盤にある概念である。この違いを裏付ける事実として、«все как у людей»（すべてにおいてみんなと同じ）という表現は、日本語の「ふつう」や「人並み」とは異なり、「せめて」に対応する «хотя бы» や «как минимум» という表現と共起することができない。甘んじるべき平均値的なレベルを表す日本語の「人並み」と違って、これらの表現は人が誇りとするレベル、目指すべきレベルを表すので、甘んじるレベルにふさわしい「せめて」とは概念上矛盾するからである。

ここには、Kekidze＆田中（2004）でも考察したようなロシア語社会の精神主義的で理想主義的な傾向が見て取れる。こうした傾向と関連して、ロシア語社会では勝ち負け評価の表現が日本語社会ほど広く用いられていないという事実も挙げておく必要がある。「人と同じ」であることが誇るべきものである以上、当然そこには勝ち負け評価の入り込む余地が無いからである。

3．背景としての「立場」と «свои»

以上に見てきた日露両言語の表現の違いは何に起因するものだろうか。それは、それぞれの言語社会を支えるそれぞれの概念世界のキーワードの違いに起因すると我々は考えている。この節ではそれを検証していきたい。

3－1．日本語社会の「人目」と「立場」

日本語社会の「みんなと同じ」は、2－1．で見たように、「ふつう」、「人並み」、あるいは「常識」によっても表されるもので、大多数の人々の平均値的なあり方を意味している。しかしここで留意しなければならないのは、人が「ふつう」、「人並み」、「常識」と言うとき、その内容はその人の置かれた状況によって異なるということである。例えば、「子供くらい生まないと、人並みになれない」という時の「人並み」は、「結婚している女性」の平均値としての「人並み」であり、すべての人々の平均値としての「人並み」ではもちろんない。「人並み」、「ふつう」、「常識」の具体的内容を規定する個人の状況は、「立場」という表現によって包括的に表すことができる。

(31)友人で「普通はそうするよね」という口癖の人がいるんですけど、それはその人にとっての普通であって、立場や世界がかわれば、普通はという言葉も変わってしまうのにな～っていつも思ってました。そう思いつつも普通、とか常識にしばられてしまうこともあります。

（http://plaza.rakuten.co.jp/nao1021/diary/200410080000/）

㉜立場が違えば常識も違う。一方の常識が他方の非常識なのは当たり前。

（http://esu.oresama.org/200110c.html）

「立場」は、田中＆Kekidze（2005a）で考察したように、いわゆるタテの関係にある社会的地位だけでなく、すべての人間関係における位置（役割）を含む広い概念でありながら、何らかの名誉ないし権利を本質的に内包する概念である。「立場」の評価がすなわち個人の評価となるという意味において、「立場」は人間の類型でもある（詳しくは田中＆Kekidze（2005a）参照）。日本語社会は、この類型が優位を占める「立場」社会であるというのが我々の仮説である。[1)]

人目を気にし、「みんなと同じ」ことをするのは、世間の人々からの非難や批判を受けないためである。人と違う行動、突出した行動への批判や非難の表現としては、「非常識」、「生意気」、「僭越」、「身のほど知らず」、「跳ね上がり者」、「～の分際で」、「何様のつもり？」などがあるが、これらはすべて「立場」の無視ないし逸脱を批判・非難するものである。以下は、一時期その行動が大いに世間の話題となったライブドアの堀江社長に対する批判・非難の例である。

㉝オーナーたちは考えた。「どうせ１球団入れるのなら楽天がいいだろう。三木谷は以前から相談に来ていたりもしてた。そういう常識を踏まえる部分も持っている様だし、企業としてのネームバリューも規模もライブドアよりは上だ。それにキミ、なんと言ってもＴＶにＴシャツで出てくる様な跳ね上がり者じゃない。それに堀江には、近鉄買収に名乗りを上げられたりして１リーグ化の推進を邪魔されたからな。そんな生意気な奴を参加させてたまるか」

（http://blog.livedoor.jp/rakuten_nouten/archives/7105955.html）

㉞産経新聞の「正論路線」は、国民の良心を代表しています。堀江氏は果たしてそれを否定するだけの器量でしょうか？　僭越にも程があります。

（http://blog-yamasaki.com/archives/001094.html）

上の例㉝は、ライブドアがプロ野球界に参入しようとして対立候補の楽天に敗れたときのもので、ライブドアの堀江社長が、相手の「立場」を尊重して相談に行くといった「常識を踏まえ」た行動をしなかったこと、「立場」にふさわしい服装をしなかったことで、「跳ね上がり者」「生意気」などの批判を呼んだことがうかがわれる。例㉞は、その後に起こったライブドアによるニッポン放送株大量取得を問題にしており、産経新聞社説（2005年２月18日）の「正論路線」を支持し、「公益性と社会的責任」の大きい放送事業に、「器量」のない人物（前後関係から言えば、単なる利潤追要求を目的とした一企業の経営者にすぎない人物）が参入することを、「僭越」な行為、つまり「立場」を逸脱した行為であるとして非難している。こうした批判･非難が示すように、「ふつう」であ

ること、「常識」的であることは、結局自分の「立場」をわきまえること、その「立場」らしくあることにほかならない。[2)]

以上に見てきたのは表立って行われた非難の例であるが、一般的には、日本語社会では角が立つことを嫌い、批判的な言辞は内心に思ってもあまり口にしない傾向がある。実際、上に掲げたたぐいの表現をあからさまに他人に向けて用いた例は、インターネットで検索しても比較的少なく、むしろそうした非難の行為を批判する例が多い。しかしその一方で、他者による「本音」の非難を回避するために、先回りして自分の行為を批判して見せる次のような例は目立って多い。

㉟「日本芸能再発見の会」の会員ということで案内状が送られてきたので、身のほど知らずにも出席してしまいました。

(http://www014.upp.so-net.ne.jp/t-kita/nikki0105c.html)

㊱まだ参加して一年ほどの若輩者ですが、MATSUDA様がお忙しいようですので、分かるところだけ、僭越ながらお返事させていただきますね。

(http://www.eeeweb.com/cgi-bin/backup/yybbs.cgi?page=90)

㊲私も偉そうなことを言える立場ではありませんが、一言言えるとしたら、自分を信じてがんばってください、ということですね。

(http://www.azsa.or.jp/career/people/k_hosaka.html)

発言の前置きとして、上の例㊲と同趣旨の「こんなことを言える立場にはないが」などの言辞を口にするのは、日本語社会ではかなり一般的な言語行動である。この事実は、「立場」をわきまえないという批判・非難を受けることを多くの人が恐れていることを示している。それは、言い換えれば、誰かの「立場」を傷つけることが社会生活上きわめて重大な過誤であると多くの人が認めているということである。かくして日本語社会の「気になる人目」もまた「立場」社会の反映にほかならない。

日本語社会は、個人の持つ資質よりむしろその個人が占める「立場」を重視する「立場」社会である。そこで「立場」社会の成員は、その多様な資質をそれぞれの面で伸ばすことよりも、他者との関係における「立場」の強弱に意識を向けることになる。それは、他者との関係を常に勝負と捉え、「立場」の強弱によって勝ち負けを決める傾向へと自然につながっている。その点で「立場」社会は、感情の一体感が重視され、その中では個人の資質あるいは個性が尊重されるロシア語社会と異なっている。

3－2. ロシア語社会の「人目」と «свои»

ロシア語社会でも、すでに述べたように、「みんなと違う」ことをする人、「特

別」な人には «а ты что - особенный? »（あなたは何、特別なの？）という非難の表現が向けられ、嫌われる傾向がある。しかしこうした表現の意味を、日本語の「何様のつもり？」などといった非難から類推して解釈することはできない。「何様のつもり？」という日本語は、「自分の立場をわきまえず、その立場を超えてえらそうに振舞っている」と話者が思った人に対して使われるが、ロシア語話者にはそのような「立場」意識はないからである。それでは、ロシア語話者はどのような動機から「特別」を嫌うのだろうか。

まず上に挙げた «а ты что - особенный? » という非難の表現およびその変異形がどんな場面で使われるかを見てみよう。例えば次の例では、市役所から届くはずの書類を受け取れなかった人が郵便局に調べに行ったところ、たまたま同じ状況にある、つまりその書類を同じく受け取れなかった窓口の人が、自分が黙っているのになぜあなたは文句を言うのか、と相手を批判している。

㊳ Мужчина, мне вот тоже не прислали, а вы что - особенный? - сказала мне почтовая тетка в окошечке.

（http://www.mn.ru/issue.php?2003-48-40）

（「私も受け取ってないんですけど、（わざわざ文句を言いに来ている）あなたは何、特別なの？」と、私に窓口のおばさんが言った。）

次の例㊴では、税務署の手違いで、多くの納税者が一年分ではなく十年分の税金を請求されてしまうということがあり、その間違いを指摘した納税者の一人が税務署の職員から逆にその行動を批判されている（これはロシアの脱税の現状を題材にした小話で、みんなが黙って払っている背景には、十年分の請求書が来ても、実はそれよりももっとたくさん脱税しているという事実がある）。

㊴ Ну и что! все остальные же платили, а этот что особенный???!!!

（http://www.anekdot.ru/an/an9811/o981126.html）

（だから何？他の人が払っているのに、この人は何、特別なの？）

上の例のいずれにも、個人的感情を抜きにして職務を厳正に忠実に果たすべきだという「立場」意識は見られない（「立場」は慣習上決まった権利や名誉を伴う概念であり、当然それに見合う義務やマイナス面も包括的に含意されている）。ここにあるのは、「（同じ状況にある）他の人が行動しない時には同じく行動しようとしない」人物からの、「他の人以上に行動する」人物への非難である。つまりロシア語社会で批判されるのは、単なる「人と違うことをする」人ではなく、「人以上のことをする」人であると言える。

「人以上のことをする人」に対する非難・批判としては、«Тебе что, больше всех надо? »（あなたはみんなより多くを必要としているの？）という表現およびその変異形もよく使われる。次の例では、村の誰もが自宅近くに井戸を持

たず、遠いところに水を汲みに行っている中で、一人だけ自分の家のそばに井戸を掘った人が批判されている。

(40) Ну, тип! Вечно ему больше всех надо! Ни у кого нет колодцев - и ничего, а у него, видите ли, - возле самого дома!

(http://www.umorist.ru/collection/altov/altov003-32.html)

(ばかなヤツ。いつも彼はみんなより多くを必要としている。他の人は井戸なしでもやってるのに、一人だけわざわざ家のすぐ近くに作るなんて・・・)

ここで批判されている人は、自分だけのために井戸を作ったのではない。隣近所の人たちにも(もちろん無料で)そこから水を汲ませている。それにもかかわらずこの行為は批判の的となっている。なぜみんなと同じように不便を我慢しないのかという批判である。

ある状況を、たとえそれが不便であっても、それどころか理不尽でさえあっても、みんなと同じように受け入れるのがよいとされるのは、それが気持ちの上でみんなと一緒にいることになるからである。またその逆に「人以上のことをする」人がロシア語社会で批判されるのは、「人以上のことをする」ことが、ロシア語話者にとって何よりも大切な仲間との感情的一体感を壊すことになると見なされるからである。つまりロシア語社会で大切なのは、「みんなと同じ」であることよりむしろ、「みんなと一緒にいる」(«быть вместе со всеми»)ことなのである。

「みんなと一緒」の「みんな」とは、«свои» と呼ばれるものにほかならない。我々の仮説ではこれがロシア語社会のキーワードである。田中&Kekidze(2005a)で考察したように、«свои» は、さまざまな場面で相手と自分との共通性を感じることをきっかけにして生まれ、さらにダイナミックにネットワークを作っていく。「私と同じだ」という共感を核とし、相手と共にあること自体が喜びとなるような感情的共同体としての «свои» はまた、日常生活のあらゆる場面で実際的に機能する互助システムでもある。要するに «свои» はロシア語社会で生きるための命綱ともいうべきものであるにも拘らず、成員にとってはその存在はあまりにも当然のことであるため、その存在や特異性が特に意識されることはない。

先に見た「ノーマルな人(人々)」とは、こうした «свои» との感情的一体感を損なう人、つまり「人以上のことをする人」、「人より多くを必要とする人」の対極にある人(人々)ということになる。次の例はその対立を示している。

(41) Журналистские группы стандартно делятся на : девочек, которым больше всех надо и на нормальных людей.

（...spectator.ru/life/education/studing_in_NSU_２-16k）

（記者たちのグループは、典型的にはみんなより多くを必要としている娘たちとノーマルな人々の二つに分けられる。）

このように、ロシア語社会において人々の行動を規制するのは、感情的共同体である «свои» の一員であるという意識であり、したがってこれがロシア語社会における「気になる人目」の基盤をなす概念である。

4. 結論

以上を要約すると、日本語社会において「気になる人目」の基盤にある「みんなと同じ」の内容は、「人並み」、「ふつう」、あるいは「常識」という表現によって理解される概念である。それは理想のレベルではなく甘んじるレベルとしての基準であり、それを埋め合わせるかのように、人々が目指すのはさまざまな意味での勝負における勝利である。一方ロシア語社会において「気になる人目」を支えるのは、「みんなと同じ」という基準よりもむしろ「みんなと一緒にいる」という感情的な一体感である。「みんなと一緒にいる」ことは理想的な状態であり最終的に目指すべき目標であって、ここには勝負の意識が入る余地はない。

こうした違いは、それぞれの言語を支える概念世界のキーワードの違いによって説明できる。日本語社会のキーワードは「立場」であり、ロシア語社会のそれは «свои» である。日本語社会の「みんなと同じ」あり方は、結局のところ、「立場」という社会的な枠ごとに決まったあり方、社会生活を円滑にするための基準をクリアしている程度のあり方であって、それだけでは個人の心情を十分に満足させるものではない。一方、ロシア語社会の「みんなと一緒にいる」というあり方は、個人の心の拠り所であり聖域ともいうべき共同体 «свои» に感情的に属しているということであり、それ自体が個人の心情を十分に満足させる居心地のいい状態なのである。

本稿で取り上げた例が示すように、一見すると同じことを言っているように見える表現も、よく調べてみると、言語の背景にある概念世界の違いから、その表現が用いられる心理的動機や人間関係において果たす役割が異なっている可能性がある。他言語の話者が出会った瞬間に違和感を覚える独特な表現よりも、理解できたという思い込みを安易に生み出すこうした表現の研究こそが重要な課題であると考えられる。

注

1）田中＆Kekidze（2005a）で「立場」についての仮説を提示した後で気づいた事実にここでふれておきたい。ルース･ベネディクトの『菊と刀』（長谷川松治訳、第三章）には我々の仮説に近い考え方が見られる。要約すれば、日本人は各人の「ふさわしい位置」が書き込まれた「地図」に従って生きることで安心を保障されるという指摘である。ただそこでは、尊重される各人の「ふさわしい位置」はもっぱら「階層制度」と結びつけられ、かなり固定したものとして捉えられている。これは中根千枝の「タテの関係」に通じるものと言えよう。これに対して我々のキーワード「立場」は、タテとヨコとを問わず広い範囲に及びながら、それぞれ何らかの名誉と権利を認められるものである。また「立場」はかなり流動的な側面も持つと思われる。人間関係を「立場」の強弱を賭けた「勝負」として捉える傾向が日常の日本語に顕著に見られるのは、状況次第で、強い「立場」にも弱い「立場」にも立ちうるからである。

2）この具体的な事例に関しては全く逆の評価も見られたが、問題の人物の行動を非難する傾向は「常識」があると自認する年長者、あるいは社会的に認められる「立場」の人々ばかりでなく若年層にも見られた。

参考文献

Benedict, Ruth 1946 *The Chrysanthemum and Sword* Boston: Houghton Mifflin Co.（長谷川松治訳　1967 『定訳　菊と刀（全）―日本文化の型―　』社会思想社）

Fillmore, Charles J. 1982 Frame Semantics. The Linguistic Society of Korea （ed.）, *Linguistics in the Morning Calm* , Seoul: Hanshin Publishing Co., pp.111-138

Lakoff, George 1987 *Women, Fire, and Dangerous things* . Chicago: The University of Chicago Press. （池上嘉彦･河上誓作ほか訳　1993 『認知意味論』大修館書店）

Langacker, R.W. 1987 *Foundations of Cognitive Grammar* Vol.1. Stanford: Stanford University Press.

Wierzbicka Anna. 1997 *Understanding Cultures through their Key Words: English,*

Russian, Polish, German, Japanese. New York: Oxford University Press.
Kekidze Tatiana、田中聰子　2004　「日露慣用表現に見る身体と精神の捉え方」『名古屋大学大学院国際言語文化研究科　言語文化論集』第XXV巻第２号
田中聰子、Kekidze Tatiana　2005a　「日露対照認知的言語研究「立場」と «свои» ―言葉の背後にあるもの―」『日本認知言語学会論文集』第５巻、pp.95-105、JCLA
田中聰子、Kekidze Tatiana　2005b　「『顔』と «лицо» ―〈顔〉概念の日露対照研究―」『世界の日本語教育』第15号（近刊）、国際交流基金
中根千枝　1967　『タテ社会の人間関係』、講談社